

柴崎大堀遺跡 4次にわたるこれまでの調査で、東西方向に延びる総延長320mの堀跡1条を確認しました。この堀跡は、室町時代のもので金田城北側の防御のための施設と考えられます。また、旧石器時代の石器集中地点1か所、平安時代の土坑などを確認し、大規模な堀が構築される以前の土地利用の様子もわかりました。

金田西坪B遺跡 奈良・平安時代の竪穴建物跡9棟、掘立柱建物跡10棟、大型円形土坑1基、古代以降の溝跡36条、井戸跡13基、火葬施設2基、地下式坑7基、方形竪穴17基などを確認しました。主な遺物は、室町時代以降の土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、石製品、木製品、銭貨などです。確認した主な遺構は中世の城館の一部と考えられ、当遺跡の東側約600mに位置する金田城跡との関連が推測できます。

金田西坪B遺跡の調査区外まで広がる大規模な堀跡



今回の発掘調査遺跡現地説明会は、3月5日(日)の行方市鶴ヶ居貝塚で開催予定です。発掘調査の成果をぜひご覧ください！

この資料は、調査途中の情報で、最終的な結果ではありません。資料の引用・掲載はご遠慮願います。

第1号堀跡



深さが場所によって異なっていました。

第6号地下式坑



南側が出入口の竪坑部で、天井部は崩落していました。

第41号溝跡



溝を埋戻す際に並べられ置かれたと考えられる土師質土器の小皿が出土しました。

第10号井戸跡



中世の井戸跡で深さ約3m、同様な井戸跡が12基も確認できました。

平成29年2月12日(日) 平成28年度第7回発掘調査遺跡現地説明会資料
研究学園都市計画事業中根・金田台特定土地区画整理事業に伴う発掘調査

こんだにし いせき

金田西遺跡ほか2遺跡

所在地: 金田西遺跡 つくば市金田宇明神 1845番地ほか
: 金田西坪B遺跡 つくば市金田宇岡道 1687番地ほか
: 柴崎大堀遺跡 つくば市柴崎字大堀 890番地ほか

調査期間: 平成28年4月1日～平成29年3月31日

委託者: 独立行政法人都市再生機構 首都圏ニュータウン本部 茨城業務部

調査機関: 公益財団法人茨城県教育財団 (つくば中根事務所)

電話 029-225-6587 <http://www.ibaraki-maibun.org>

1 遺跡の概要

金田西遺跡ほか2遺跡は、つくば市の北東部に位置し、桜川右岸の標高約26mの台地上に立地しています。

つくば市金田付近は、古代は常陸国河内郡衙域と考えられ、正倉城の一部と推定されている金田西坪B遺跡、都庁院や居宅などに推定されている金田西遺跡、郡寺跡に推定されている九重東岡廃寺が存在しています。これらの



金田西遺跡と周辺の遺跡(『地理院地図』より一部加筆)

遺跡の一部は官衙地区として国の史跡に指定されています。柴崎大堀遺跡は、室町時代の堀跡です。このように、つくば市金田付近は、旧石器時代から室町時代にかけて人々の様々な生活や活動の痕跡が数多く残され、特に奈良・平安時代においては、地域の政治的・経済的・文化的な中枢域として重要な役割を担っていたと考えられています。

2 調査の成果

金田西遺跡 今回の調査で、奈良・平安時代の竪穴建物跡50棟、井戸跡1基などを確認しました。遺物は、食膳具や煮炊具である土師器や須恵器をはじめ、役人の腰帯の飾り具である巡方・丸軋・鉈尾、郡の給食施設である「厨」の文字が墨書された土器、皇朝十二銭の一つである「神功開寶」(県内3例目)が出土しました。これらが出土したことにより、郡の役所に関わる役人、役所を維持する人々の集落であったことが再確認できました。

第 429 号 竪穴建物跡



竈には、須恵器や土師器の坏を逆さに5つ重ねて、支脚としていました。

第 440号 竪穴建物跡



住居を廃絶した窪地に遺物が廃棄されていました。その中の須恵器の盤の底部（○部分）に「厨」と墨書されていました。

第 396 号 竪穴建物跡



1棟の建物跡から3か所の竈が確認できました。北・東壁の竈から西壁の竈へ造り替えられていました。（写真は南から）

第 397 号 竪穴建物跡



竈の天井部が一部残っており、煙道部の奥をトンネル状に掘り抜いていました。

第 439号 竪穴建物跡



建物跡の床面（○部分）から初鑄765年の銭貨（神功開寶）が出土しました。（写真は東から）

出土した神功開寶

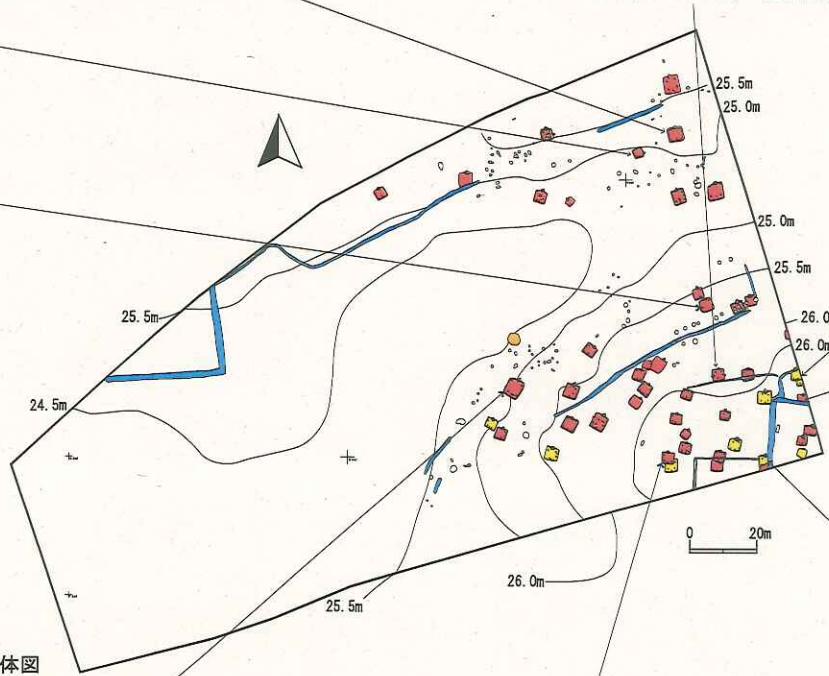


当時の役人が身につけた腰帯具



- 竪穴建物跡（奈良時代）
- 竪穴建物跡（平安時代）
- 溝跡・堀跡
- 土坑
- 井戸跡

金田西遺跡全体図



第 420 号 竪穴建物跡



住居を廃絶した窪地に炭化材や遺物が多く廃棄されていました。その中には、当時の役人の腰帯具も含まれていました。

第 402 号 竪穴建物跡



須恵器の甕や鉢が竈の補強材として、土師器の坏や小形甕が支脚として、再利用されていました。

第 394 号 竪穴建物跡



竈の右袖近くの床面で出土した土師器から調査区で最も古い時期（8世紀初頭）の建物跡とわかりました。（写真は東から）